

100回目の夏 高校野球

5

強豪校行かずプロの道

昨夏の甲子園に出場した49校のうち私立校は41校に上る。強豪校に入学して憧れの舞台に立ち、プロの世界を目指す球児は多い。だが、近年、プロを目標に掲げても、アピールの場でもある甲子園にこだわらない球児が現れてきた。

あえて公立校に進学し、プロ選手となったのは、日本ハム投手の立田将太(22)だ。中学時代に16歳以下の日本代表に選出され、多くの強豪校から誘いを受けた。しかし、選んだのは甲子園出場が1度の地元の大和広陵(奈良)。「体が未熟な時から投げさせられ、肩や肘を壊したくなかった」と振り返る。

入学後も過度な投球練習は行わず、肩や肘に違和感を覚えれば、監督に「投げない」と伝えた。ただ、練習は真剣に取り組み、主将も務めた。メンバーに恵まれ、2年生で選抜出場。初戦敗退だったが、悔いはなかった。「先を見据え、

選択肢



独立リーグにプレーの場を求めた三山(左)

甲子園のために全てはささげない。こういう道がある」と、プロで活躍を示した

一方、強豪校に進んだものの、野球と距離を置くようになった球児もいる。

大阪の私立校のエースだった三山篤郎(17)は入学後、過酷な練習や厳しい指導で野球への情熱を失いかけた。「やらされる野球では成長できない」。退学を決意した時、独立リーグへ

ースボール・ファースト・リーグ」の兵庫、和歌山の取り組みを知った。両球団が通信制高校などと教育提携し、生徒を育成選手として受け入れるシステムだ。

両球団の代表、高下沢は「環境に合わなかった時、他の道がない。才能があるのに行き場を失った球児の受け皿を作りたいかった」と説明。1年目の今年、三山や新1年生ら9人が両球団

「自由度の高い環境」重視も

の育成チームに加入した。三山は実力が認められ、兵庫の一軍に昇格。5月には巨人三軍との試合でも投げ、「色んな経験ができ、野球を楽しめている」。中学生から問い合わせもあり、高下は「自由度の高い環境を求める球児は多いのではないかと推測。今後、提携校は増えるという。

「高校野球を経験せず、プロに近い環境で指導を受けたい選手はいる」と訴えるのは、プロ野球・楽天傘下の「東北楽天リトルシニア」の設立を発案した相田健太郎(44)。「当初は高校生、大学生にも広げようと模索していた」と明かす。球団は現段階で対象を広げる考えはないが、中学3年の小野天之介(14)は「甲子園に出られなくても、高校生対象の(プロ傘下の)チームがあれば」と願う。高校の野球部以外でプレーできる環境が増えれば、球児たちの可能性も広がる。(敬称略)